
ブラッドコレクション

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラッドコレクション

【Nコード】

N3949V

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

やたらと採血の回数が多い病院がある。やたらと採血が上手な看護師がいる。やたらと採血される患者がいる。そのことに誰も気が付いていない理由とは？ 残念だが「ホラー」ではなく、あくまで「SF」なのであった。

昨日も採血（前書き）

この作品を、僕の大好きな「前下がりのショートボブ」のヘアスタイルで、この作品のアイデアを提供してくれた沢木香穂里さんに捧げます。

【空想科学祭2011・参加作品】 【RED部門】

昨日も採血

「はい、小田さん。採血しますねー」

その看護師は、僕のベッド脇に来て採血の準備を始めた。ハイウエストの切替ライン、小さな襟に細めパイピングが施されたデザインで、黄色いワンピースのナースウェアを着ていた。ナースウェアの胸元ポケットにはペンが数本、その横に『金沢』というネームプレートがついていた。

「腕を出してください。利き腕じゃない方がいいわね。左腕の袖を捲くってください」

僕は金沢の言われた通りに、ベッドに寝たまま左腕の袖を捲り上げると、金沢は肘の上に駆血帯を巻き付けた。

「それじゃあ、親指を掌の中に入れて握ってください」

金沢は結構な美人で、院内でも有名のようだった。前上がりのワシングで、肩に乗ってしなやかに揺れ動くふにやりとしたカールがフェミニンでエレガントな雰囲気を出していた。顔立ちは面長で、目は大きく、鼻筋も通っていて、口もやや大き目と少々顔のパーツは大作りだったが、バランスの取れた配置のせいで程よい美形を成していた。彼女自身も大作りなことを知っているのだろう、明暗やボリウム感を少な目にして、大人しい化粧を施していることが、更に清楚な感じを演出していた。

そして、注目すべきは金沢の注射や採血の技術である。院内では抜群のテクニクで、全然痛くないという評判だった。もともと僕ら男共は彼女の顔に見惚れているうちに注射や採血が終わってしまうので、痛みなどわからないという話なのだが、子ども達にも同様の噂がある程なので、そのことは確かなことなのだろう。

僕が親指をギュッと握り締めると、金沢は肘のあたりを擦って血管を浮き立たせた。

「いい血管ね」

看護師の言葉が僕を褒めているのかどうか、僕は判断できなかった。

金沢が目的の血管を見極めた後、その周囲を酒精綿で消毒した。そして、針を付けたホルダーを僕の腕で構えた。

「ちよつと痛いかも」

僕にそう声を掛けながら、金沢は穿刺した。すると、間髪置かずに採血管に赤黒い血液がドーツと流れ込んできたのだった。金沢は手際良く血液の溜まった採血管を抜き、素早く次の真空採血管を差し込んだ。その間、全く痛みを感じなかった。噂は本当だったのだ。三本程、採血管で採血し終わると、駆血帯を緩めて穿刺部を酒精綿で押さえながら針を抜いた。

「しばらくは、揉まないでこの酒精綿を押さえていてくださいね」

僕は言われたまま右手で酒精綿を押さえっていると、金沢は駆血帯やホルダー、採血した採血管をトレイに載せて片付けた。

「血が止まったら酒精綿を捨ててくださいね。お大事に」

そう言って、金沢は僕に笑顔をくれた。金沢のその笑顔の口元から妙に眩しく輝く八重歯が印象的だった。

今日も採血

「はい、小田さん。採血しますねー」

金沢は、僕のベッド脇に来て採血の準備を始めた。前日と全く同じ様子で。

翌日の金沢は、ホワイトのサイドフラスナーで、ロールカラーのエレガントなワンピースのナースウエアを着ていた。前下がりのワシントンが歩く度にフワフワと揺れて、ハリウツドの映画女優のような顔立ちに清楚な感じの化粧を施し、本当に男好きのする笑顔を振り撒いていた。

だが、僕はふと疑問に思っ、金沢に問い掛けた。

「え？ また採血するんですか？」

僕は前日の午後の主治医の回診で、血液検査の結果を聞いていたからだ。ここは院内に検査室を持っている。組織検査まで行える設備があるくらいだから、血液検査の項目は大抵、即日に出るはずだ。

事実、夕方の回診で、主治医の佐藤医師はこう言っていたのだ。

「血液を調べましたが、少々コレステロールが多いかな。あとは標準値の中に収まっていますよ。問題はありませんねえ」

この主治医の話からすると、この採血は必要ないと思われたのだ。「小田さん、聞いてないんですね？ 佐藤先生から『ちょっと気になるから、もう一度採血してくれ』って指示があつたんですよ。佐藤先生は慎重だから、念のためにと黙っていたのかもしれないよ」

「はあ、そうですか」

僕は、何か引つかかるモノを感じながらも金沢の指示に従った。

前日と全く同じシーケンスで、金沢は僕の腕から血液を採取していった。前日と違うのは、採血した腕が右腕だったということと、採血管の本数が前日の倍の六本だったことだ。

その日の夕方の回診の時に、僕は思い切って主治医の佐藤医師に採血のことを訊いてみた。

「先生、僕の血液ってどこかおかしいのですか？」

佐藤医師は首を傾げた。

「いや、おかしいところはないですよ。前にも言った通り、血液には全然問題はないですが。どうしてそんなことを訊くのですか？」

僕は、ちよつとモジモジとした。

「疑問があれば答えますよ、小田さん。何でも訊いてください。今のご時世は『インフォームドコンセント』と言って、現在の病状とか予想される副作用や代替の治療法については十分な説明しないといけないですから」

にこやかに話しかける佐藤医師に促されて、僕はおずおずと話をした。

「実は、午前中に採血をされまして。『気になることがあるから』と佐藤先生に指示されたと看護師に説明されたので、何か具合が悪いところがあるのかなあと思いました」

佐藤医師は、急いで僕のカルテをめぐって確認していた。

「いや、僕はそんな指示を出していませんよ。それに、カルテにもそんな記録はありませんよ」

僕と佐藤医師は、しばらく顔を見合わせていた。

採血騒動

更に翌日の午前中は院内がとても騒がしく、その喧騒は遠く外来受付の方で聞こえていたのだが、段々とその騒音の音量が大きくなった。あまりにも騒がしいので、僕はベッドから起き上がって病室の扉を少し開けて、扉越しにナースセンターの方向の通路を覗き見た。

「おいっ！ 金沢はいるか！ 看護師の金沢だ！ 金沢を出せっ！」
大きな声で怒鳴っている男は、たくさんの看護師に囲まれて押し留められていたが、それでも看護師達では抑えきれない様子で、ズルズルとこの病棟のナースステーションまで来てしまったようだった。

その男は、薄汚れたグレーのポロシャツにヨレヨレの紺のジャケットを羽織り、ズボンは黒地にシルバーのラインが入ったジャージを穿いて、サンダル履きだった。目は窪み、頬はこけて、無精髭を生やして、既に異常な感じの男だったが、一番印象的だったのはその男の顔色だった。真っ青で、全く血の気を感じられなかったのだ。
「近藤さん、落ち着いてください。貴方はもう完治したんですから！」

そう怒鳴った看護師に、近藤と呼ばれた男は怒鳴り返した。

「何を言っているんだ！ 俺は全然治ってないぞ！ さあ、早く俺から血を採って調べてみてくれ。きつとどこかが悪いはずだ！」

近藤はそう言い終わると、再び暴れ出した。

「止めてください！」

「落ち着いてください、近藤さん」

「暴れないでください！」

看護師達は口々に叫びながら、近藤を押し戻そうとしていた。

その時、向こう側の通路の病室から金沢が現れた。金沢は、シルエットがAラインの、襟元の大きなボタンがアクセントのガーリー

ワンピースのナースウェアを着ていた。それを近藤は目ざとく見つけた。

「おい、金沢！ 金沢美鈴！ 俺だ、近藤だ！」

金沢は、名前を呼ばれてふと顔を向けた。近藤と呼ばれている男を見て一瞬表情が曇ったが、すぐにニコニコとした顔に戻って騒ぎの中心である、近藤という男に近づいていった。

「あーら、近藤さん。今日はどうしたの？ もう病院に来なくてもいいんでしょ？」

近藤は、急に大人しくなって身繕いをしてから、金沢に対面した。「そんなことを言うなよ、美鈴。まだ、どこかおかしいんだ。なあ、頼むよ。頼むから、俺の血を採って調べてくれよ。お願いだ、美鈴」

近藤は、金沢に切々と訴えたが、金沢の答えは明確だった。

「近藤さん、それは出来ないわ。だって、近藤さんはもう病気が治ったのよ」

それを聞いた近藤はガツクリと肩を落とした。その様子を見た金沢は、近藤の手を取って握り締め、近藤を凝視しながらこう言ったのだった。

「分かったかしら？」

看護師にとって『スキンシップ』は常套手段だ。だが、こんな狂気の男に通じるのだろうか。僕は甚だ疑問だったが、事実は意外な方向へと進んだ。

「うん、分かったよ。俺、帰る」

金沢の顔を凝視していた近藤は、ニコニコとして金沢にそう言った。そして、回れ右をしてトボトボと玄関の方へ歩き出したのだった。

ブラッドエンジェル

その日の深夜に、僕はいつもは感じない尿意を感じて、ナースステーションの横にあるトイレに行った。何の問題もなく排出して病室に戻ろうとした。

ふと気が付くと、ナースステーションがいつもより皓々と照明が点いているような気がした。そして、ナースステーションの中から何やら話し声が聞こえてきたのだった。耳をそばだてると、どこかで聞いた声のように思われた。とりあえず確かめようと、ナースステーションに近づいてみた。

「なあ、頼むよ。お前が俺にサインをしたから、こうして忍んで来たんじゃないか。俺の血を捧げるから、俺に『あれ』を与えてくれ。お願いだ」

男の声がした後に、女の声が聞こえた。

「イヤよ。もうあんたの血はあたしには必要ないから。これ以上、あたしにまわり付かないでよ。あたしの正体がバレちゃうじゃないの」

僕はその時に思い出した。今日の夜間勤務は『金沢美鈴』だったことを。女の声は明らかに金沢美鈴だった。そして、男の声にも聞き覚えがあった。そうだ。昼間に大騒ぎした『近藤』とかいう男の声だということに気が付いた。

「俺の血が最高つて、美鈴は言っていたじゃないか。違うのか？ どうなんだ？」

「もっと最高の血を見つけたのよ、うふふ。あの甘美な味わいは、あんたの血とは雲泥の差だわ！」

「そんなことを言うなよ。なあ、お願いだ。あと一回でいいから。頼む、この通りだ」

近藤は土下座をして、金沢に懇願していた。

「仕方がないわね。今日のあたしは極上の血を飲み損ねてるし。あ

んたの血で我慢してあげるわ」

「やったー、さあ、早くやってくれ！」

浮き足立つ近藤に、金沢は表情を変えずに言った。

「でも、これで打ち止めよ。これ以上、血を抜いて『あれ』を服用すると、あんたは死ぬわよ。分かったわね？」

「ああ、分かった、分かった。大丈夫だから」

「二百CCが限界よ。それでいいわね」

「四百CCでもいいぜ」

ナースセンターの診察台に仰向けになって腕を捲り上げた近藤と、テキパキと献血の機械を準備をする金沢の会話が続いた。そして金沢は抜群のテクニクで素早く近藤に献血の針を打ち込んで血を抜き始めた。

「血を抜いている間に『あれ』を出すわね」

「おう、頼むぜ」

そう言つと、金沢の輪郭が青白く輝き出したかと思つたら、金沢の身体全体が輝き始めた。僕は眩しくて目を閉じた。目蓋を通過する光の刺激がなくなったと感じて目を開けると、そこには得体の知れない生物が存在していた。姿の形は一見して人間のようだが、背中に薄い膜の羽根が生えているのが大きな違いだった。そして身体全体は白っぽい半透明で、顔の表情はその形があるだけで機能しているようには思えなかった。

ここまでならば、それはまるで『天使』のようでそれ程驚かなかった。だが次の瞬間、その得体の知れない天使のような生き物が大きく変化したのだ。頭がパツクリと半分に割れて、その裂けた中から赤い液体があふれてきて、それを得体の知れない生物自身がすくい取っていたのだ。

その異様な姿と光景に、僕は思わず声を上げてしまったのだ。

「何だ、あれは！」

僕の声に気付いた得体の知れない生物は素早く僕に近づき、無言のまま僕をナースセンターの中へと引きずり込んだ。僕はもう口も

聞けない状態だった。ただワナワナと震えてその場にいるしかかった。得体の知れない生物はそんな僕を両腕で拘束した後、金沢の聲が僕の頭の中で響いた。

「あら、こんな所にいたの、あたしの可愛い子ちゃん。これで手間が省けたわ。あたしは、リマキナ星のヒュメナイオス。あなた方のいう『天の川銀河のサジタリウス腕』から来たの。これでも、あたしは美食研究家として、天の川銀河では有名なのよ。美味しいモノを探し求めて天の川銀河を旅しているの。偶然通り掛かった、こんな片田舎のオリオン腕のちっぽけな太陽系、チンケな地球でこんなに美味しいモノを発見できるとは思ってもいなかったわ」

僕の顔を見て、リマキナ星人のヒュメナイオスは舌なめずりしているように思えた。

「ざっと説明したけれど、理解できたかしら？ 貴方が、あたしの見つけた中で最高の血の味の持ち主なのよ。貴方にも『あれ』を与えて、あたしの虜にしてあげるわ。うふふふ」

そう言つて、リマキナ星人のヒュメナイオスは、裂けた部分から流れ出る赤い液体を僕の口に含ませた。その瞬間に、僕は人間が味わったことのない、得も言われない恍惚なトランス状態に入ってしまったのだった。

「ああ、これが近藤という男が言っていた『あれ』なんだ。ああ、何とも抗しがたい世界だ。ああ、精神が溺れていくう。ああ、心が癒されていくう。そして、感情が沈んでいくう。肉体から抜け出てしまいそうだあーっ……」

異星人のドラッグで、僕の精神は混沌とした意識の奈落の底で完全なる癒しにノックアウトされたのだった。

明日も採血

気が付くと、僕は自分の病室のベッドに寝かされていた。既に日が昇り、完全な朝になっていた。

周りを見渡すと、金沢が僕を心配そうに見つめていた。

「大丈夫ですか？」

僕は金沢の顔を見たが、驚くことも恐怖することもなかった。むしろホッとしたくらいだった。

「ええ、大丈夫です」

僕がそう返事をする、金沢は嬉しそうに採血の道具を僕のベッドに置いた。

「それじゃあ、小田さん。採血しますねー」

金沢は、僕のベッド脇に来て採血の準備を始めた。前々日やその前の日と全く同じ様子で。

この日の金沢は、サックスブルーで、可愛い丸衿になっているワンピースのナースウエアを着ていた。前下がりのワンレングに軽くウェーブが掛かっていて歩く度にセクシーに揺れて、派手なグラビアアイドルのような顔立ちにガリーな化粧を施し、男達を振り向かせる笑顔を振り撒いていた。

「はい、採血してください」

僕は、異様に明るい声で金沢を受け入れて、金沢のされるままに採血されていた。そして、僕は肝心なことを金沢に訊いたのだった。

「今夜も『あれ』をいただけますか？」

すると金沢は、にこやかに笑って答えた。

「ええ、いいわよ。あんなものでよかったら」

そして、金沢も僕に訊いた。

「あたしにもいただけるかしら？」

僕はゆっくりうなづいた。

「ええ、どうぞ」

金沢はポケットから更に採血管を二本、取り出した。そして、僕と金沢は顔を見合わせてほくそ笑んだのだった。

明日も採血（後書き）

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

皆様の率直なご意見、ご感想に耳を傾けたいと思っておりますので、この作品の感想欄または「空想科学祭2011」の感想板にお書き込みをしていただけたなら幸いです。

また「空想科学祭2011」の企画サイトには、もっと素敵なSF作品が目白押しですので、そちらもお読みいただけたらと思います。

この物語はSFであり、ホラーではありません。また、実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3949v/>

ブラッドコレクション

2011年8月16日03時12分発行